

天才とは何か？

「天才」という言葉を聞いて思い浮かべるのは、知能指数（IQ）が高い人、たとえば140以上とかそんな人のことだろうか。だが、これはあまりにも単純な見方だ。天才とは単にIQが高い人とは限らないし、IQが高いからといって天才だとも限らない。実のところ、IQは125もあれば「天才」になるには十分なのだ。IQ以上に求められるのが、自由な想像力と、それを応用できるスキル。そしてそのスキルを駆使して、自らが定めたゴールへと突き進む**情熱的な意志の力**だ。

また、ひと口に「天才」と言っても、あらゆる分野ですばらしい才能を発揮するわけではない。**特定の領域や物事**に対して、天才的な資質を発揮するものだ。「分子生物学の天才」「人の気持ちを読み取る天才」「プログラミングの天才」「サッカーのPKの天才」といった具合に。このように範囲を絞れば、多くの人のにとって「**天才**」は**手の届き得る目標**となる。もちろん、いくつもの分野で拔ぎん出た才能を発揮できるタイプの人もいて、「博学な天才」と言われたりするが、これはまた別の意味

での「天才」だろう。

私は以前の著書で、自分なりに「メタスキル」と名付けた5つの能力——
感じ取る力フエール…すなわち共感力と直感力、見通す力フォール…すなわちシステム思考力、
夢見る力ドリーム…すなわち実践的な想像力、実現する力イミタ…すなわちデザイン力、そして
学ぶ力ラーニング…すなわち新しいスキルを習得する能力——を紹介した。いずれも、機械と
人間の協同作業が重要性を増しているこの現代社会においてとくに有用な才能で、
IQの高さには必要ない。必要なのは、**創造性を重んじる態度**だ。そこで本書では、そ
の創造性に関わるルールを紹介することにした。読者が将来を見通し、新たな発明
を生み出し、社会に貢献し、自分で成長し続けるための一般的なガイドラインだ。
さて、改めて、「天才」とは何だろうか？ 次に挙げるのが、現時点での私の定義だ。
天才とは、洞察をイノベーションに変えることのできるあらゆる人。そしてその過
程でわれわれの世界観を変えてしまう人。言い換えると、**創造性を独創性の段階**
クリエイティブ オリジナル
にまで引き上げられる人。これを哲学者ショーペンハウアーは巧みに表現している
——「才人は、誰も射ることのできないのを射る。天才は、誰にも見えないのを射る」。

本書で紹介したルールに目新しいものはひとつもない。だが、いずれも新たなものを創造する助けとなってくれるはずだ。ミケランジェロは槌つちやノミは発明しなかったが、そういう道具を使って聖母子ヒエツタ像などのすばらしい彫刻を作りあげた。大理石の彫刻を素手で彫ることができないのと同様、生来の感性だけではすばらしいアイデアを形にすることはできない。ルールが必要だ。ルールは天才の道具なのだ。助けになると思ったら利用すればよい。邪魔になるときは脇へ置いておけばよい。

本書は薄い。意図的にそうした。創造的な人はプロジェクトをいくつも抱えて忙しい日々を送っている。本を読む時間すら惜しいはずだ。だから、あえてなるべく薄い本にして、簡潔なアドバイスを込めた。ランダムに読むもよし、重要だと思われるところに下線を引くもよし。折にふれて読み返し、再確認すると効果的だろう。

46のルールで完璧だ、などと言うつもりはない。また、ここでは、無視されたり、忘れ去られたり、安易に破られたりしているものを意識的に選んだ。まずは戦術に関するアドバイスから始めた。適切なアイデアを得るための方法だ。続いて、実行のための実用的なコツを挙げた。アイデアを適切な形にするための方法だ。次いで、創造的なスキルを伸ばす方法。最後に、より大きな世界へ羽ばたいて才能を発揮す

る方法を紹介した。

注意——本書『小さな天才になるための46のルール』は、誰が読んでも役に立つ種類の本ではない。残念ながら、誰もが天才になれるわけではない。だが、**生まれつき才能がないという人も多くはない**。「意志」あるいは「スキル」が欠けているだけのことが多い。十分な意志のない人がこの本を手取ることはないだろう。だが、スキルに関しては多少の助けと勤勉が必要だ。幸い、好きなことを追求しているときにはそれを苦勞とは思わないものだ。

本書で紹介したのは、いずれも時の試練に耐えて効果が実証されたものばかりだ。これによって、読者の内なる闘志に火がつき、創造的な才能をどんどん伸ばしていつでももらえたらとてもうれしい。意欲が学びを加速させ、学びが意欲をかき立てる好循環の無限ループ。これこそが、天才を生む魔法の仕組みだ。これを行動の中心に据えれば、自ずと結果はついてくるだろう。

マーティ・ニューマイヤー